

11月20日 第11日目

15日間という短くない期間の海外研修も今日を含めて残すところ5日。本日は残る1班の2年昆、1年金村・沼崎・松田のグループに同行。男子グループは働き方改革の視点から、女子グループは女性の活躍できる社会づくりの視点から、21世紀のライフモデルを探究することをテーマにしている。

このグループのリーダーは、アメリカはテキサス出身のオースティン。英語のほかに中国語、そして実は（最後まで生徒の前では隠していたが）日本語も自在に操り、無尽蔵のコミュニケーション能力でフィールドワークを遂行していく彼は、生徒たちのヒーローであった。

最終日は聞き取りよりも巡検を重視した設計となっており、台北の中心部から小一時間ほど電車で走った、淡水という風光明媚な観光地へ。

海のような大河に面する「黄金水岸」とよばれる美しい岸辺には、夜市のような屋台が軒を連ね、そこを20分ほどかけてゆっくり散策していくと、1600年代にスペインが設けた城をベースとして、オランダ、清と改修を重ねて今に至ったその名も「紅毛城」（かつて中国人が西洋人を「紅毛人」とよんだことにちなむ）という史跡に至る。

我々が到着する頃にはすっかり好天となり、暑いくらいの日差しの中、日本統治下ではイギリスの公使館として使用されていたという建物群を見学した。展示にはありがたいことに日本語のキャプション付き。それだけ多くの日本人が訪れるということなのであろう。

見学を終えると岸辺の商店街に戻り、30cmもあるうかという巨大なソフト（日本円にして約140円）をほおばったり、随所で我々の鼻腔を刺激する「臭豆腐」（その強烈なにおいは納豆の比ではない）に初挑戦したりと、台湾の歴史や食文化、観光のあり方に対する理解を深める半日となった。

そして本日はそれで終わらず、午後の半日を使い、4日間にわたるフィールドワークのまとめを行う。まずはグループ単位で各自が体験したフィールドワークの振り返り。これまでのツアーリーダーとの英語によるやりとりで幾分慣れてきたのか、初日よりもスムーズに英語でのグループワークが進んでいく。

それが一段落すると、続いてはフィールドワークのまとめのプレゼンテーション準備へ。我々は翌日以降に控えている最後の交流プログラム、政治大学附属高級中学校への訪問の中で、これまで行ってきた一連の研究の集大成となるプレゼンテーションを行うことになっている。その準備も兼ねて、日本で作ってきた調査計画までのプレゼンテーションに、結果と考察を加える作業を行った。

満足いくものを作ろうとすると、用意された1時間の枠では到底足りず、どのグループもぎりぎりまで（というか当初の予定を越えて）粘って作業を行っていた。

当初はほんの1時間でプレゼンを用意するのは難しいだろうと考えていたが、全てのグループが与えられた時間を最大限に活用して、プレゼンの体裁を調えるところまで漕ぎつけられていた。そしてその内容も、地域のコミュニティに対する帰属意識が、若者とそれ以上で明確に区別されることや、低賃金長時間労働が指摘される台湾で、意外に待遇に対する不満を覚えていないこと、共同体の核となるイベントとしては芸能や産業よりも食を通じた交流に興味を示していることなど、実際に生の声を聞いてみなければわからないような新たな知見に富んだものばかりであった。この後時間をかけてどれほど完成度を高められるかが楽しみである。

プレゼンとそれに対するツアーリーダーたちからのコメントが終了すると、いよいよ4日間苦楽を共にしたリーダーたちとお別れの時。いずれのグループも思い思いに持ち寄った贈り物を手渡し、写真と一緒に撮りながら、別れを惜しんでいた。

全体を通して途中いくらかのハプニングもあったものの、最初から最後までそつなくさらっとこなすよりも、ぶつかったりもがいたり悪戦苦闘しながら乗り越えた（今はまだ乗り越えたという実感がないかもしれないが）経験があるからこそ、最後の最後にお互いをより深く理解し合えたはずだと強く信じている。そして最後まで投げ出さずに向き合い続けた12人のことを、引率者として心から誇りに思う。

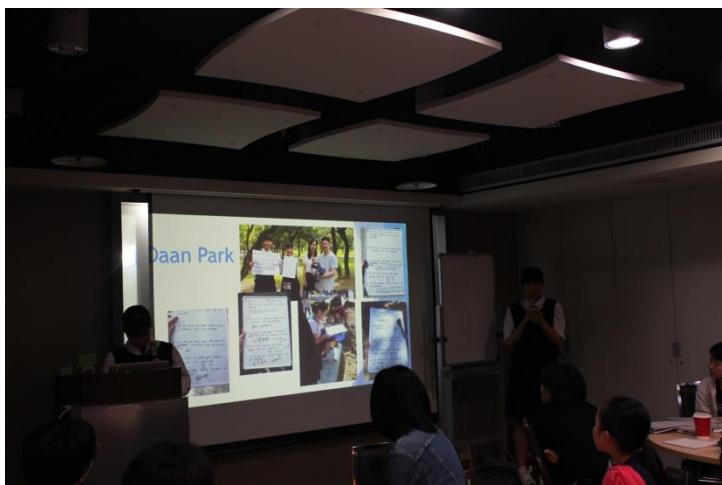
淡水の象徴、紅毛城



これほど大きくても 100 円少々



4 日間の成果が早速プレゼンに



ツアーリーダーの皆さん謝謝！

